

< 2017年 11月 >

古賀 順子

「サヴォワ邸」

11月19日 日曜日。黄色い落ち葉に白いコンクリートの壁が美しい晩秋の「サヴォワ邸」を見に行きました。

ル・コルビュジエ(1887-1965)と従兄弟ピエール・ジャンヌレ(1896-1967)が、保険会社の社長ピエール・サヴォワ夫妻のために建てた、週末を過ごす別荘です。1928年から1931年にかけて建設され、パリからセーヌ川に沿って西北30kmの町ポワシーにあります。パリからポワシーまでは、RERA線に乗って30分。そこから50番のバスに乗り継ぎ20分です。距離的にはそう遠くありませんが、ポワシー行きのRERは30分に1本、バスも1時間に3本と待ち時間は必須です。第一次世界大戦が終わり、第二次世界大戦勃発までの約20年、建築の在り方が大きく変わります。1920年代、ル・コルビュジエは、純化した線と機能性を主唱する新しい建築を提示します。1927年、その建築理論『新しい建築の5つのポイント』を発表。そして、その5原則を実践したのが「サヴォワ邸」で、ル・コルビュジエ建築のマニフェストです。

(1) ピロティ。「サヴォワ邸」の敷地に入り、最初に目に飛び込んでくるのが、ピロティです。ル・コルビュジエは、ピロティによって「空中に浮かぶ箱」建築が可能になると記述しています。丘の上にあり、セーヌ川に向けて大きく広がる景色を見渡すため、玄関は北に面しています。南から車で入り、パルテノンのような東のピロティを潜り抜ける設計です。

(2) 自由な設計。鉄筋コンクリートを使用することによって、建物の構造壁がなくなります。「サヴォワ邸」は、地下1階・地上階・2階・庭園テラス(ソラリオム)の4層構造ですが、鉄筋コンクリート「ドミノ構造」のお陰で、各階の間取りは構造上の制限を受けず、自由自在に配置することができます。2階がサヴォワ夫妻と息子のための空間ですが、3方に窓を配したサロン兼食堂からは素晴らしいパノラマを眺望できます。

(3) 自由なファサード。ピロティのお陰で、支えるこ

とから解放されたファサードは、室内と外の境をなくし、自然の光や風景を取り込みことができます。「サヴォワ邸」玄関は、ガラス張りで、開放感に溢れています。1920年代自動車を持つことは限られた階層のみで、サヴォワ夫妻と息子用3台を収容するガレージが西に配され、自動車の出し入れに適した機能性を備えています。

(4) 横長の窓。「サヴォワ邸」は引き戸式のガラス窓だらけです。どの部屋にも連続する水平の窓が、自然の風景と光を取り込みます。

(5) 屋上庭園。テラス形式の屋根は、植物を植えたり、日光浴の場所になったり、風景を楽しむ空間です。画家を目指していたル・コルビュジエは、「サヴォワ邸」の屋上に四角い開口部を設けて、自然を切り取る「額縁」に見立てています。

この5原則が、ル・コルビュジエが提唱するもう一つの理論「建築のプロムナード」を可能にしています。作品の周りを見て、歩いて、動いて建築を発見することです。室内に坂道を作り、足元に気を取られず、少しずつ建築空間を発見していく仕掛けです。

サヴォワ夫妻がル・コルビュジエに設計・施工を依頼したのは、夫人が「チャーチ邸」(1927年)の建築家を希望し、当時は珍しいガレージ、冷蔵庫などの電化製品、全館暖房などに惹かれてでした。実際の住み心地はと言うと、サヴォワ夫妻は20通近くのクレームを送っています。コンクリートの防水性に問題があり、雨漏りがする。ガラス窓の精度も今ほどでなく、南向きのサロンは夏は暑過ぎ、冬は寒すぎるなどの理由で、パリの自宅からポワシーに行く回数は減り、ドイツの占領下にはドイツ軍、その後連合軍の使用で、別荘は荒れ果ててしまいます。7ヘクタールあった敷地も、ポワシー市が大部分を買い取り、現在は高等学校になっています。「サヴォワ邸」が取り壊しを免れたのは、ル・コルビュジエを評価する当時の文化大臣アンドレ・マルロー(1901-1976)の力で、建築家が存命中に歴史的建造物に指定されたからです。

オスマン様式の石の建物に対峙するコンクリートの住まい、機能性、審美性など、「サヴォワ邸」には今日なお訪れる人が絶えない魅力があります。

「サヴォワ邸」(撮影：古賀 順子様)

